

第五章 緩やかな兆し

1.

「……神志那あ、先生困ってしまうなあ、こういうことじゃ」

そう言うってハラスメントマスター寺嶋は、職員室の自分の机の上に広げた数枚のプリントアウト画像を安いボールペンでこづき回しながら、オレの顔をイヤらしい眼で見してきた。反吐が出る。

「そんな顔するなよなあ。先生だってな、お前のこと心配してこういうこと言ってるんだからな。悪い仲間と付き合う、っていうかな、生活が荒れると、お前にとってプラスにならないわけだし」

夜更かし過ぎるとお肌も荒れるぞー、と言って、寺嶋はへらへら笑った。

画像には、オレがレイオウと夜の商店街を歩いている姿が映っていた。

「他にも何枚か届いてるけどな……まあこのカレがどういうヤツかは知らないけども。やっぱり夜中にこういうカレと繁華街うろつくっていうのは、褒められたことじゃないのは分かるよなあ、神志那」

カレ、の発音に悪意を感じる。

「ファミレスでも騒いでたんだって？ ファミレスはほら、ファミリーで行かないと。子どもたちだけで行くもんじゃないよ。なあ」

うまいこと言ったつもりか。

「女の子二人連れて出歩いてたりとか。ちゃんと連絡入ってるんだぞ。せつかくウチみたいな名門入ってるんだから、わざわざ他校の生徒と付き合うこと、ないんじゃないかー？」

「終夜は同級生ですよ」

「ん？ あ、これ終夜か。えらく乱れた服装してるから先生分からんかったな。ふうん……でも、終夜だってな、ホラ分かるだろ？ 大きな声じゃ言えんが、先生もいろいろと苦労してるわけだよ終夜には。だからお友達としては、あまりオススメ出来ないなあ」

お前の推挙なんか知るか。

+

PCなんてお寒い概念が一般化しているこの国のこと、もちろん学校も、親にとっては重要なコントロールの対象となる。幼稚園保育園を含むあらゆる教育施設が一つ残らず厳格な受験制度を敷いているため、三、四歳で早くも有名大学へ向けたバトルロイヤルが幕を切つて落とされるのである。

受験産業は数兆円市場、五歳から家庭教師を付ける家も珍しくなく、ノイローゼの小学生がばたばたと入院。中学高校ともなれば学生同士ライヴアルを蹴落とそうと脚を引っ張り合い、毎年一月から三月は合否を巡る戦と涙が全国を席卷し、社会システムは半ばマヒする。

それというのも毎年、幼小中高大専と全学校の各種ランク付けが教育省から直に発表されるためである。うちの学校が名門というのも寺嶋の世迷い言ではなく、その順位が高い、という即物的な意味に過ぎない。幼稚園から偏差値を発表しているのは世界広しといえどこの国だけらしい。他にも校風、指導力、発展性などを、極秘裏に来校した調査員が採点し公表する。「子どもたちの努力の成果を公平に見極めるため」だそうだ。

で、そうやって順位づけられた学校に、子どもたちは受験の結果に応じて振り分けられる。自然、上位校へいくに従って上流家庭、というか上品なお子様方が集うものだ。「きちんとした子」が在籍している。そして親としては子どもにも「よい」友達づきあいをしてほしいわけで、「よいお友達」をゲットしたくば「きちんとした子」がいる「よい学校」に入る必要がある。そういう親の願望も、熾烈な受験の一因となっている。

†

話が長くなったがともかくそんなわけで、親も教師も子どもがむやみやたらと他校の生徒と仲良くするのを是としないのだ。せつかくの受験の振り分け結果が意味をなさなくなるし、下手をすれば学校のランクも落ちかねない。

つまりこいつは、そんな下らない保身のためにオレに説教しているわけだ。何が心配だよ。

「お前みたいな成績優秀な生徒の生活態度が崩れると、先生としても悲しいんだよなあ。他の子たちにも影響しかねないし。ま、その辺は今度の保護者会でも議題に上がると思うけど。親御さんがガツカリしないよう、神志那もちゃんとそこんとこ、考えるんだぞ」

ハイ、なんて言ってたまるか。

ちなみにオレは中学受験の時にそこそこ勉強して何となくこの美園学園に受かったおかげで、今はご覧の通りのんびりぐったりオタライフを送っている。今後ともこのスタンスを貫いていきたい構えだ。別にエリートコースになんか興味ないし、そこそこの大学に行ければそれでいい。勝ち組だろうが負け組だろうが、どっちだって構わない。

頑張って戦って必死で努力して、行き着く先が勝ちか負けかの二つだけなんて、そんなバカみたいな話ゴメンだ。

「あ、そうだ神志那」

さっさと職員室を後にしようとするオレの後ろから、間の抜けた声で思いつくように寺嶋が声を掛けた。仕方なくオレは立ち止まり、ため息をつく。

「お前、この娘こには以前からよく会っているよなあ……御子みこ元さん、だったか？」

洪面こうめんでオレは振り返った。

「ただの幼なじみです」

「うん、それは聞いている。豊とよの子なんだった？　かわいいじゃないか」

「……あの、何が言いたいんですか」

んー、いや、と寺嶋は言葉を濁す。

「最近新しい法律が出来ただろ、P.C.関連の。親の希望に従って、子どもの社会生活および交友関係を制限することが出来るっていうやつ。知ってるか？　前までは精々注意・警告くらいまでしか出来なかったところを、キョーイク教育委員会からの公的な命令の形で、P.C.チップ使って厳しく決められる。行動、接触も出来なくなるぐらいな」

……正直、知らなかった。

最近レイオウたちに連れ回されていたせいでニュースもあまり見ていなかったし。その手の報道になるとあのウザスキンヘッドの演説が始まるの

で、不愉快でろくすっぽ聞いていなかったのだ。
いつの間に、そこまで話が進んでいたんだ？
「つまり、よくない友達と付き合っていると、面倒なことになるぞ、ついでなことだな」

「……双葉がよくない友達だつていうんですか」
すると、違う違う、と慌てて寺嶋は首を振った。

「変な意味に取らないでくれよう。全然そんなんじゃないやなくて。ただ、耳が不自由な子なんだろう？ だったら親御さんだつて当然心配なことも多いだろう。どうしても街中で危険もあるしな。なにお前があんまりあちこち連れ回したり、帰りが遅くなったりすると、神志那、お前の方がよくない友達だと思われかねないぞ。な？ 今は長年仲良くしているから、つていう理由で目を瞑ってもらっているかも知れんけども。お前がこのごっついカレみたいなワルっぽい友達とつきあい始めた、みたいに言われたら、向こうの親御さんだつてお前と付き合わせるのはちよつと、なんてことにもなりかねんし。そこで例の法律適用されたら、悲しいのはお前の方だろ。違うか？」

だから、これは俺からの忠告だよ、と寺嶋は結んだ。オレはうつむく。
意図はともかく中身は正論だから、何も言えなかった。

2.

職員室から出た後もしばらく今の話を考え込んでいて、オレは前を見ていなかった。すると、下駄箱の前で、思い切り誰かと正面からぶつかった。

「あ、ごめんなさい……え、神志那くん？」

慌てて顔を上げて見ると、それは速水さんだった。オレだと気づいた彼女はずいぶん驚いた様子で、顔を赤らめ頬を両手で押さえ、眼を円くしていた。少しの間、二人で向かい合う。

気まづくなって、オレは尋ねた。

「今から、部活？」

「ええ、そうよ……ねえ神志那くん、何か嫌なことあったの？ 暗い顔してる」

「ああ、まあ……ちよつとね。大したことない」

「何かあったら言つてね。あたしでよかつたらいつでも相談に乗るわ」

素晴らしくまっすぐな眼差しで、速水さんはオレと視線を合わせる。道徳の教科書にでも載つていそうな一点の曇りもないバツチリ爽やか笑顔だ。大変気持ちのよいものではあるけれど、やっぱりオレは苦手だと再認識した。別に誰かに相談に乗ってほしい訳じゃないんだよね。

オレがその旨^{むね}ぼかしつつ伝えると、今度は急に彼女の方が天気予報の雨マークみたいな顔になった。分かりやすいのは結構だがえらく極端だ。

「……あたし、最近落ち込んで。一生懸命瑞歩ちゃんと仲良くなるように頑張ってるんだけど、全然相手にしてもらえないの。あたし嫌われてるのかな。どうしたらいいと思う？」

うーん。難しい問題だ。特に嫌っているということはないだろう。終夜が彼女に興味ないだけだ。でもそんなこと直^{じか}に伝えるわけにもいかない。

「あのさ、彼女、終夜……さん、にもさ、友達いるんじゃないかな。学校以外のところにさ。だからそんな、速水さんが無理しなくても、放つておけば大丈夫だと……」

「学校以外でどうして友達が出るの？」

間髪入れずに問い返され、オレは絶句した。彼女は続ける。

「学校って、もちろん勉強する場所だけど、それよりむしろ友達を作る場所でしょ？ 塾とか習い事とかでも確かに少しは友達出来るけど……でもこの学校に通ってるんだから、友達だってこの学校の中にしか出来ないじゃない。わざわざ他校の友達を作るんだったら、この学校に通っている意味がないわ。違う？」

完全無欠の微笑みでそんなこと言われたらどうしたらいいか分からない。まあ、そうかも知れない。

そうかも知れないけど、でも、なんだか……

「あんまり外で、身元が不確かな見知らぬ人と知り合いになるっていうのもいいこととは思えないわ。危ないもの。うちの学校に通っている人なら、どんな人なのかはつきりしているでしょう？ だから普通、友達を作るのは同じ学校の中だよ。それなのに瑞歩ちゃん、友達がいなみたいで、それであたし心配になって」

はあ、としか言いようがない。まっすぐな眼をしてまっすぐなことを速水さんは話している。これもまた見事なまでに正論だ。そして困ったことに、オレは正論が苦手なのだ。

つい思いついて、こんなことを言ってしまう。

「速水さん……そんな頑張らなくてもいいんじゃない？」

「あらどうして？ そんなあたし、無理してないわよ」

可笑し^{おか}そうに速水さんは応えた。それから突然声を落とし、ほんの少しオレから眼を逸らして、うつむき加減で速水さんは言う。

「あの……あたしね、あさつて、今度の日曜日に、テニスの試合があるの」「へえ」

「結構重要な大会で、あたしも先輩たちと一緒に出場するんだけど……その……もし、よかったら……観に来てくれないかしら」

「オレ？」

オレは首を傾げた。何でオレ？ 彼女なら声掛ければギャラリーグらいいくらでも集まるだろう。女子でも男子でも、彼女に誘われれば一発で落ちる。普通は。

「あ、でもホント、無理しなくてもいいのよ、もし他に用事があつたら気にしないで。でもその、ひよっとしたら神志那くん興味あるのかな、って。ときどきほら、あたしたちの練習風景見てるし……」

わあ、バレてたのか。麗しのユニフォーム姿を心のアルバムに収めていました、なんて変質者みたいなことは言えない。別にオレに限らずとも男子ならスコートの速水さんがいれば思わず眼を向けてしまうだろう。

ただ、あいにくテニス興味ないしなあ。というよりスポーツ全般まったく興味ない。他人の迷惑を顧みない中継と傲慢この上ない延長という二つの要素によってオレの夜のお楽しみ^{しんやアニメ}を妨害する腹立たしいもの、という印象しかない。生産性がないという点ではオタもスポーツマンも大差ないのに、なんで後者がこうも優遇されるのだろう。たぶん、単に声が大きいからだ。

まあそれはともかく、テニス観戦ねえ。全員が速水さんレヴェルなら……正直魅力を感じるけど、現実問題そうもいかないし。興味ないところに愛想振りまけるほど人間が出来てもない。それになにより、日曜はレイ

オウたちと約束がある。

「……見ていてもらえるとやっぱり、張り合いもあって違うわ。大切な日は……大切な人に見てもらいたいもの。お話したいこともたくさんある。あたしがどんな人間かも……もつと知ってもらいたい。だから……」

速水さんは顔を上げた。

「……だからあたし、あさつての試合、神志那くんに、来てほしい！」

「ゴメン日曜は用事あるから無理だわ」

苦笑いしてオレは手を振った。悪いけど仕方ない。穴埋めなら適当に誰でも呼べるだろう。そう思ったオレは、さらりとそう言っ立ち去ろうとした。

実は明日、土曜日何か知らんが終夜が一人でオレんちに来ることになっているのだ。さらにそのメールを受信したとき、またしてもたまさか居合わせた双葉から、

『お話があります』

と言われた。だもんで今日は早く帰らないといけない。さっきの寺嶋の説教も相まって、今はそんな諸々で頭がいっぱい、とてもよそ事に思いを巡らす余裕はないのである。

そうして申し訳なく思いながらもそそくさと靴を履いて出て行こうとした、その時だった。

ふと……オレは気づいた。

速水さんが、フリーズしたように、無表情になっていた。

まっさらな顔になっていた。

微動だにせず、曖昧などこかを注視したまま、口を閉ざしていた。

まるで、全てのシステムが停止したように。

何だろう。

「……速水さん？」

こわごわオレが問うと、はっと我に返ったように笑みを戻して、速水さんは応答した。

「え、なあに？　どうかしたの？」

「いや、速水さん今、何か……」
「何が？」

本当に何を訊かれているのか分からない様子で、彼女は不思議そうに顔を傾けている。その素振りはいつもと何も変わらない、美人で可愛らしい速水さんそのものだった。先の一瞬は、まるでなかったことになったかのようだった。

「あ、ごめんなさい神志那くん、あたしもう練習行かないと。遅れちゃう」
じゃあまた来週ね、ばいばい、と透き通った声で速水さんは言うど、テニスコートへ向けて一陣の風のように駆けだしていった。

呆気にとられてオレは彼女を見送る。しばらくぼけっと突っ立っていた。

まあ……いいか。

3.

今日は日曜日。

一週間ぶりに集合したオレたちは、駅前の喫茶店に来ている。ああその、普通の喫茶店だ。

『どうした？ 二人ともえらくギスギスしてねえか？』

角砂糖を五つ入れたコーヒーを美味そうに飲むレイオウはそう尋ねる。
双葉も終夜も、

『そんなことない』

と応えた。オレは肩をすくめた。

昨日の土曜日も、またいろいろあったのだ。

諸々のやりとりを交わした末、終夜はオレの部屋へ一人で来訪してきた。しかしそのメールをすでに見ていた双葉は、何を思ったか先回りして来ていたのである。部屋に入るなりそんな双葉に気づいた終夜は、瞬間的に負のオーラを発散しだした。意味が分からない。一方で双葉の方も、顔に似合わぬ陰悪なムードを醸し出す。両者は視線を合わせたまま動かなくなり、何もしてないオレは間に挟まれ押し潰されそうになっていた。

オレは二人が何しに来たのかもまだ聞いていないのに葬式のような雰囲気

気になるし、双葉も正座したまま何も言ってくれないし、オレと終夜は延々体育座りをして時間が過ぎていくし。また少し経つと女子二人だけでモバイル使って話を始めたけれど、オレを入れてくれないし。

二人は仲悪いの？ とオレはついに根本のところを尋ねたけれど、まったくそんなことはない、と二人共に言われて、混乱は増すばかり。そして最後には、双葉が終夜に何かを言われて柄にもなく頭を抱え、沈んだ様子になってひどく悩んでいた。

とまあ昨日そういうことがあったのだと話してやると、レイオウは何だか変な顔になった。大好きなマンガが突然あらぬ方向に展開しだした時みたいなの、がっかり極まりない表情だった。オレは怪訝けげんに感じ、尋ねる。

「なんだよ。何か分かったのか？」

「いや……こういうヤツって現実にいるんだな、と思っただけ」

それ以上は何も応えてくれない。頼りにならないヤツだ。

さて、全員で相談した結果、本日はレイオウと終夜にこの辺りを案内してもらおうこととなった。商店街をテリトリーにしているオレたち二人だが、それぞれ守備範囲は微妙に異なる。そこで、自分の詳しいジャンルの店を紹介してもらうことにしたのだ。二次しか無理なレイオウが何を紹介してくるか、オレは若干の危惧を抱いた。

レイオウの言う店へ向かって、オレたちはいろいろな意味で賑やかな通りを歩く。ふと見れば、双葉と終夜は歩きながらモバイルで楽しげに会話していた。昨日のアレは一体何だったんだろうか。やっぱりよく分からん。

ただ、今日の双葉は目映まばゆいまでに純白のワンピースに薄いピンクのボレロを羽織り、他方終夜は茶色のベレー帽に首に掛けたヘッドフォン、そしてロングカーディガン、インナーのキャミ、ぎりぎりのショートパンツまでが全部ブラック、ちやうど天使と小悪魔のようなよい対比だった。

渋めのブルゾン姿のレイオウが呟く。

「気合い入りまくりだな」

「ん？ ああ」

応えるオレは、今日もくたびれたパーカーにジーパン。思いついたことを言ってみた。

「……ひょっとしてあの二人、昨日はこの服の話してたのかな」

「ある意味ではそうかも知れねえな」

そしてレイオウは、真の闘いとは常に気づかれねえもんだな、と何やら意味深なことを言った。

着いた店は幸い、一般向けの名作アニメやRPGのグッズも多く置いてある明るい店だった。子ども向けアニメ映画のキャラぬいぐるみを手にとつて喜んでいる双葉にオレがホッと息をつくとき、レイオウが肩を叩いてきた。何だよと振り返った先には、鈍を持った巫女美少女の1/8フィギュアがでかかかと陳列してあった。オレは脱力する。

「買ったきゃレイオウが買えよ」

「もう持つてる。そうじゃなくて、ゼロミコの話だ。先週のアレ、どう思った？」

ああアレね……オレは応える前に鬱になった。

サブタイトルが「モウスベテガシンジラナイ」である時点でヤバイと思つていたので。大体、先々週の独白スペシャルが原作を大いに逸脱した（というか無視した）内容だった。

そして先週。ヒロインの家系の猟奇的な謎が明かされ過去に数え切れないほどの人を葬ってきたことが判明すると共に、遂に崩壊した主人公が家の中で暴走、家族四人をバラバラにしてお社ヤシロにお供えするという、もうその、何というか、この、ううん。

原作だつてここまで無茶はしていなかった。ストーリー展開上致し方ないとはいえ、いくらなんでも、と思つた。まあオレも、レイオウにああして意見を言われていなかっただら今でも面白がつて観ていたかも知れないが。そして次週は、「チノアメ、フレフレ」。予告も最早、口では言えないようなシーンが連続していた。

「うん……」

オレもレイオウも、それきり黙ってしまった。どっかから忠言が飛んだが最後、全P連、キョイクシヨ教育省が何を言い出すか。厭な予感が頭をよぎる。

けれど、オレたちには何も出来ない。

4.

次にオレ達が向かったのは、終夜がちよくちよく行くというコンピュータショップだった。商店街の中でもひとときわ目立つ明るい大きな量販店的建物で、ありがちな怪しげなところなどまるでない。これも双葉のことをおもんばか慮おもんばかってなのかな、と少しだけ思った。

が……しかしそれは、三階パーツ売り場へ上がってくるまでのことだった。突如として眼の色が変わった終夜は、びっしり並んだ素人目には判別不能の細かなチップ類の前へブリキのおもちゃのような足並みで直行、そのままその場から、押しても引いても一歩たりとも動かなくなった。

こんな売り場、まっとうな人間には何も面白くない。しかしこちらがうるさく不平を言い続けると、しまいに終夜はヘッドフォンを装着してオレたちを遮断してきた。なんてヤツだ。

仕方がないので双葉との会話用にモバイルだけ借りて、俺たち三人は二階に下り、CD・DVD売り場を冷やかにまわった。といっても双葉はCDにあまり関心がないので、映画やアニメのDVDを眺めるばかりである。最近の映画なら大体日本語字幕が付いているので、双葉も見て楽しめるのだ。TVアニメもセリフフォローを兼ねて付けてくれればいいのに、と思う。

すると……その時いきなり、場内に響き渡る大音響で、甲高いアラームが鳴り渡った。オレとレイオウは飛び上がる。何も悪いことをしていなくても緊張する。辺りは急にざわめいた。

『え、どうかしたの？ 何かあった？』

不思議そうに辺りを見回す双葉に急ぎ説明してから、オレは何か危険が発生したのでは、と警備員やどこからか湧いてきたホゴイン保護員たちの駆けつける先を見やった。

それから……がっくりきた。

ちょうど、DVD売り場の奥の隅の隅の桃色カーテンが掛かった一角から、気弱そうなメガネニキビの男子学生が引っ張り出されるところだった。顔を真っ赤にして痛々しい彼の姿を、オレはもう見ていられない。

ホゴイン保護員に引っ立てられて、そのまま彼はどこかへ行ってしまった。

『あれ、なんだろう。あそこ何売ってるのかな？ ちょっと見てきていい？』
興味を示しそちらへ行こうとする双葉に真っ青になったオレは、全精力

を費やして制止した。

『あ、あ、あそこはあのほらその、か、関係者以外立ち入り禁止の場所なんだよ。勝手に入ると怒られるから。だから双葉は別のところを見て頼む一生のお願い』

思わぬところで一生のお願いを使ってしまったがやむを得ない。あなたが嘘でもないし。ありがたいことに、DVDボックスが山のように並んでいるという一般店ではまず見られない光景に驚いた双葉は、フラフラとそっちへ行ってしまった。

「しっかし……アイツもバカだよな」

騒動の顛末を見終えてから、レイオウがオレに向かってシニカルに笑った。全くだ。あの学生、PCチップのことを知らないのだろうか。大型量販店であんな場所に未成年が入ったら瞬殺されるに決まっている。どうかしていると思えない。

「三次のエロなんて正視に耐えねえもん何がいいんだか」

どうかしているのはこっちだった。オレは何となしに気になって、自分の着ている色あせた赤パーカーの布地をぺらぺらめくってみた。

「ん、愛、どうかしたか？」

「いや……もしPCチップの場所が分かたらさ、そこだけ服から切り取ってやればPCシステムから脱出できるんじゃないかなーってちよつと思つてさ」

オレがそう言うと、レイオウはハア？と思いい切り肩を竦め、それから盛大に笑った。カチンと来てオレは睨み付ける。

「何だよ！」

「そりゃこつちのセリフだ。お前知らねえのか？ PCシステムはそんな生やさしいもんじゃねえぞ。まず第一に、PCチップは検出できねえよう国が開発した先端技術でガードされてる。子ども用の服の布地にランダムに織り込まれてんだよ。小さすぎて手触りなんかではまず分からねえし、放出する電磁波も微弱、スキヤンなんか素通りする。チップ関係で具体的などころは全部アパレル業界のトップシークレットで、洩らしたら重罪。だから見つけんのは不可能」

それは知っている。そんなものが仕込まれているから子供服は高価なの

だ。

「第二に、一着の中に仕込まれているチップは一つとは限らねえ」

「え、そなの？」

「当たり前だが。一個だけだとそれが機能しなかったときに全部バアだろ。フェールセーフのために予備が不定数入ってんだよ。全部機能しねえ確率は限りなくゼロに近い。防水加工ばっちり滅多なことじゃ壊れねえしな。それが子供服の上着からパンツまで同じなんだから、一つ残らず取り除いた頃には服はズタボロ、着れたもんじゃねえよ。回避するには全裸しかねえ」

やるか？と悪趣味な笑みを浮かべて訊いてくる。このヘンタイが。

「冗談だ。とにかく突破口はねえ。成人する以外は」

そんなのまだまだ先だ。何だか、今着ているこの服がガチガチの拘束着に思えてきて、全身むずがゆくなってくる。鉄鎖てつさでがんじがらめになっているようなものである。

5.

もうそろそろいいだろうと三階へ戻ってみると、信じられないことに終夜は両手いっぱい紙袋を抱えて、なお品定めを続けていた。大してかさばるもの売っている場所でもないというのに恐ろしい。言っても言っても根が生えたように微動だにしない終夜を、オレたちはなんとか無理矢理店の外へと連れ出した。

その流れで何故か大量の荷物を持たされたオレを尻目に、他の三人は、商店街の人混みの中をスイスイ歩いて、次なる目的地を目指した。

途中で店を後にさせられたことを根に持つ小悪魔終夜は、精密機器が多く含まれているので大切に扱うように、壊れた場合は分かっているな、と平気な顔でオレに命じて、先を歩いている。終夜が持っているのだから大したことないだろうと思っ受けて取ったら、腕が抜けるほど異様に重かった。どうなっているんだ。

そうしてちょっと裏通りに入ったところで突然、そのチビっこい悪女が、立ち止まって、真横の建物を見上げた。

「……あ」

その視線の先を見て、イヤな記憶が甦ったオレは荷物に押しつぶされうになった。そこは、古ぼけた映画館だった。先週の日曜日、双葉と終夜の二人と一緒に遊んだとき、ここへ来たのだ。映画館の入口では、小学校高学年ぐらいの男子二人がチケットを買っている。

するとまた、あの耳障りなアラームが鳴り渡った。

びくりと震えたオレは荷物を落としかけるが、間違っても弁償できそうもないのでフルパワーの根性で堪える。見ると、チケットを買っていた小学生たちが、入場口に仕込まれたP.Cセンサーに引っかかっていた。

『あれ、私たちがこの間見た映画だよ？ あの子たちどうしたのかな』

双葉がオレに手話で訊いて小首を傾げているが、オレは文字通り手一杯で応えられない。代わって雰囲気からおおよその内容を読んだレイオウが、モバイルで簡単に答えた。

『R指定に引っかかったんだ』

そう。このマニアック映画館は往年の名画を掛けて安価で観させてくれるという、それだけならなかなか気の利いたところである。問題はその名画がことごとくスプラッタホラーであるという点で、今やっているのも殺人鬼がチェンソウとか斧で首すばーんとかゾンビわらわらとかまあそういうアレだ。

この国ではP.Cチップを使えば子どもに対して自在に規制が掛けられるが、この指定もその一環である。教育省キョウイクシヨウの委託機関が国内で上映される全映画をチェックし、「子どものためにならない」と思われる描写がある場合は三歳刻みでR指定を掛ける。他にも演劇にコンサート、歌舞伎からアイスショウにまで同様の指定が入るので、来日公演の時なんかは揉めたりする。

しかしこの業界、やっぱり反骨精神の強い大人が仕切っているらしく、アングラ演劇なんかは隠れてヤバイ芝居をやったりしているそうだし、現にこの映画館も、カビの生えた輸入ホラーに絞り込むことで審査の網を、かいくぐるまでは出来なくとも緩めてはいる。

おかげでこの映画も、内容があんなののにR12指定で留まっているのだ。

……あ・ん・な・の・な・の・に！

あーもう！ あんなもんR90指定にして感性が程良く減退した頃に観ればいいんだ。程良い刺激になるだろう。感受性MAXの十代であるオレは入場する前からその危険な匂いを感じ取り、終夜にも双葉にもやめようやめようよと主張したにも拘わらず強制鑑賞、二時間地獄を味わった。忘れたくとも忘れられない血みどろの名場面たち。

すると、何やら夢見がちな目をした終夜が、妙に妖艶に呟いた。

「……もう一回観たい」

いやいやいやいやいやいやありえないアリエナイ。全力で拒否の意を示そうとするが、両手の荷物が重すぎて満足に動けない。

オレが一人愕然とする中、話を聞いた双葉はウン、と笑みをこぼして頷いた。

『面白かったよね。いいよ。レイオウくんは初めてだよね？ あのね、この映画すごくってね』

そうなのだ。先週も双葉は全然怖がっていなかった。音がどうかさういう問題ではなくてただ純粹に怖がっておらず、その眼は児童文学を読んでいるときとなんら変わりなかった。知りたくなかった意外な一面。だったら一体何が面白かったのか是非訊いてみたいが、今はそれどころではない。

みんなで一緒に映画を観るのは悪くないけど、先週とおなじもの観たって仕方ないんじゃないかなあどつかよそへ行ってもっと楽しいヤツを……と掠れた声でオレが願い奉ると、レイオウがとどめの一撃を放った。

「昨日から新作って書いてあんど。続編だつてよ。前作が霞むほどの身も凍る恐怖、だそうだ」

わーお。2だつて。ストーリーに限界が来る一般映画と違って、無駄に予算が潤沢になるせいで確実に前作を上回ってしまうというホラー映画の2？ ウソでしょ？

「……絶対観たい。観る。来い」

こんな時に限ってメガネの奥の目が輝いている終夜は、オレの服を握りしめると鼻息荒くチケット売り場へ向けて歩み出す。オレはすごい勢いで変な汗が流れてきている。心拍数が急上昇している。双葉もレイオウも表

情一つ変えず終夜に続いている。操られてるんじゃないか。
イヤだ。イヤイヤイヤイヤ。助けて。
ギャー！

+

二時間後、虚無と喪失の狭間で揺れながらオレは映画館を後にした。
満たされた表情の終夜。

何ということもない顔の双葉。

感心したような面持ちのレイオウ。

『……愛くん、大丈夫？』

双葉は心配そうにオレの背中をさすってくれる。荷物はレイオウが持つてくれているので、オレは思う存分唇をかみしめてしゃくり上げるのをこらえ、目を拭うことが出来る。

好きな娘の前で怖い映画観て泣いちゃう十四のオトコってどうよ。

今だけは美少女にしか見えないこの外見に感謝した。少なくとも赤の他人に笑われることはない。まあ確かになかなかのもんだったしな、とレイオウがさりげなくフォロウを入れる。

「しっかし、カワイイなあ、お前」

慰めになるか。

6.

外ももうだいぶ暗くなってきた。たいそう機嫌をよくした終夜（外見上は無表情）は、次はあの店に行きたい、と指さして勝手に歩いていく。ワガママ姫か。企画趣旨はもうどこへやら。まあ、いいけど。終夜が教えてくれる新世界に興味津々らしい双葉が、嬉々としてその後が続いているからだ。

「そーいや愛、前からずっと訊こう訊こうと思ってたんだが」

ソフトウエア専門店に足を踏み入れる天使と小悪魔の後ろ姿をぼーっと眺めながら、レイオウがいかにもどうでもよさそうに尋ねてきた。

「何」

「お前何で、『愛』って名前になったんだ？」

「はあ？」

あからさまにカチンと来て突っかかるオレ。さっきの今で情緒も不安定だ。まだ眼も赤いんだぞ。そこへそんな腹の立つ質問ぶつけられたらもう立ち直れないかも知れない。レイオウは慌てて手で「抑えて抑えて」のポーズを作り、言い訳をした。

「いやな、ぶっちゃけあんま男に付ける名前じゃねえだろ？ 何か事情があるんじゃないかと思ってよ。女の子の予定だったとか？」

「そうじゃない」

オレは深く息をつき気持ちを落ち着かせると、崖っぷちの犯人の心持ちで淡々と語り出した。

「……初めは『ひとし』だったらしいんだよ」

「全然違うじゃねえか」

「まだオレが母親の腹の中にいるときの話だ。それを親が姉貴に教えたら、六歳だった姉貴はうまく言えなくて、いとしくん、いとしくん、って言ったらしいんだよ」

「可愛いな」

「親はそれを聞いて、ああそっちの方がいいな、ひとしでは割とありがたいだし、いとしなら意味も気が利いてる、と思って、『いとし』に替えたんだよ」

「ふうん」

「で、字を『愛』と当てたんだよ」

「……ああ」

「それを親は姉貴に見せたんだ。初めて出来る弟でテンション上がったんだだろうな、わざわざ難しい漢字を辞書で調べて。読みが『あい』だ、って知った姉貴は、あいくんあいくんって言って、また騒いだらしいんだよ」

「……」

「それで、親はそれを聞いて、ああそっちのほうがいいな、と思ったんだそうだよ」

レイオウは目を逸らしていた。

オレも目を逸らしたかった。

「……ま、でも、アレだ。その……うん。公平に言って、いい名前だと俺は思う。愛、だしな。大事だぜ、愛。だから……別にその……名前のせいで、お前がそうなった訳じゃ、ない、わけだし……」

硬派な不良が差し向けてくれる優しさを痛いほど感じる。オレは自分の襟足の髪をくりくりと弄ってから、疲れたOLのようにゆっくり嘆息した。すると、レイオウはなぜかさらに演説を続けた。

「ああ、そうだよ。名前なんか、愛、些細な問題だ。だろ？ んなもんで人生左右されてたまるかって。ただの呼び方に過ぎねえよ。どうだっていいんだ。大体お前、『愛』って、何にも恥じることない名前じゃねえか。堂々と名乗りやいいんだよ。よく似合ってる。お前はそれが気に入らねえのかも知れねえがな、やっぱ本人に合った名前ってのが何よりだ。大切だよなあ、名前。なんてったって、こればかりはどう足掻いても子どもは変えようがねえからなあ。逃げようがねえ。まさしくPC？ 絶対的な親の権限だよな。参るよなあ。あは、あははははははは」

「……何か、あつたの？」

レイオウは沈黙した。話の途中から、何やら様子がおかしかった。

「ねえ、レイオウ。そういえば、『レイオウ』って本名なの？ 慣れちゃったから忘れてたけど、名乗るときなんかゴチャゴチャ言っごまかしてたよね？ ねえ……君の本当の名前は、何？」

「……あ、二人戻ってきたぞ」

一切目を合わせようとしないうまま、レイオウは向こうへすたすたと歩いていった。

どう考えても妙だった。らしくない。熱っぽく語るのも怪しかったし、そもそも彼なら、触れられたくない話題をあらかじめ話の流れまで予測した上で避けるぐらいのことは容易に出来るはずだ。なのにオレの名前の話題を、上の空で振るなんて。どうしたんだ？

しかし、その答えは、思いの外早くもたらされた。

7.

店から帰ってきた終夜は、また両手いっぱい荷物を抱えていた。隣の双葉は苦笑している。さっきの店の袋は今レイオウとオレが手分けして持っているの、今晚だけでとんでもない量の買い物になる。レイオウが呆れて肩を揺らした。

「おいマジかよ」

「……何か悪いか」

ムツと口を固く結んだ終夜は、呆れるオレたちを睨み付けた。

「別に悪かねえけどよ、んなに買っていいのかっていう……」

「……欲しかったんだ。私の勝手だ」

怒る素振りを見せながらもどこか恥ずかしがっている終夜は、それを隠すように「ん」と言っ、両手の袋をオレたちに突き出してきた。オレはワザと目を逸らす。

「オレは使用人じゃないよ。終夜が欲しくて買ったんだから、それぐらい自分で持てよ」

いつまでも荷物持ちなんかに使われてはたまらない。オレがそっけなくそう言っ、ウーと小さく唸りながらも終夜は渋々従った。お前は子犬か。それにしても……こんな安くないだろうに、どこから次々と予算が出てくるのだろうか。

そうしてふと携帯を見ると、すでにもう夜七時近かった。楽し、かったとは一概には言えないが、まあ、家で終日くすぶっているよりは面白い一日だったろうか。

レイオウは電車で帰るらしいので、駅の正面口までオレたちは一緒について行った。次回はどうか、なんてこともダラダラ話しつつ、人通りの激しい駅前広場を四人連れでゆるゆると歩く。

すると……突然背後から、甲高い声が聞こえた。

「おにーちゃん！」

その刹那、オレの脇を歩いていたレイオウがびたりと静止した。机の上にエロ本を放置したままだと出先で思い出した時のような、凄まじい衝撃と動揺の顔で硬直している。ただでさえ硬派な面構えなものだから、見ているこっちが恐ろしくなる。

おにーちゃんおにーちゃんと言う声は、パタパタ軽快な足音と共に背後から近づいてくる。しかしその声は、何だか聞こえ方が変わっていた。ちよつと響きがブレているのだ。重い荷物を下に置いて、オレは振り返った。そこには、まるつきり同じ顔をした可愛らしい、小学校低学年くらいの女の子が二人立っていた。長めの髪を飾り付きゴムで二つ結びにして、黄色のワンピースを着ているところまで、寸分の違いもない。しかし、目鼻立ちの綺麗に通った顔立ちには、レイオウによく似ていた。

双葉、終夜、オレが瞠目する中、ニコニコの双子はレイオウの脚にくっついた。レイオウはまだ微動だにしない。きよんとしたままオレは声を掛けた。

「何だよレイオウ、妹いるなら言ってくればいいのに……」

「ジャスマン、フェアリー！」

どこからかハスキーな女性の声が飛んできた。双子が、ママーおにーちゃんいたーと叫ぶと、茶髪に派手目な服を着たなかなか綺麗なお姉さんが、両手にたくさんブランドものの紙袋を持って小走りでやって来た。へえこの人がレイオウのお母さんか。若いなあ。それに双子の妹。いいなあ憧れる……

いや。そんなことはどうでもよくて。

ジャスマン？

フェアリー？

「勝手に走っていくんじゃないよホントにもう。あれ何アンタ、こんなとこ来たの。友達と遊ぶつってたけど。あ、この子らがその友達？」

サバサバしたレイオウのお母さんは早口にまくし立てるとオレたちを見て、コンバンハ、と歯切れよく挨拶した。

何とか会釈して返してから、オレはレイオウに困惑を隠しつつ尋ねる。

「レイオウ……ジャスマンって……フェアリーって……」

「あたしねー、茉莉花じやすみんってゆーの！」

「あたし妖精ふえありい！」

死んだ魚のような目をした兄貴を尻目に、双子ちゃんは元気よく応えた。そうして二人とも、胸に付けた名札を誇らしげに見せてくれる。漢字の横には、ちゃんとふりがなが振ってあった。

この三人カワイイじゃんどの娘がカノジョなのさ、とオレらを見て豪快に笑うお母さんは、続けてオレらにこう教えてくれた。

「どーお？ カワイイ名前でしょ？ あたしが付けたんだけどね。ちよーつとこの子の名前でやりすぎたかなーって思ったから、下の子二人の時は抑えめに付けたのよねー」

動作不具合を起こしたレイオウの肩をバンバン叩きながら、お母さんはそうおっしゃった。

え？ 抑えめでジャスミン&フェアリー？

レイオウの時は、やりすぎた？

終夜は目を大きく開いたまま、双子とレイオウを交互に見ている。彼女なりに動じているらしい。双葉は何がどうなっているのか分からずあたふたしているが、オレとしてもどうやって説明したらいいか見当も付かない。

お母さんはさらに続けてこう言った。

「アンタまたレイオウって呼ばせてんの。まーったく。アンタだって立派な名前付いてんだから照れずに名乗りやいいのに。ねえ……」

「るせえな！ それ以上言うんじゃないやねえよ！」

ドスを利かせてレイオウが怒鳴りつけた。

長身大柄の不良の放つド迫力に、オレは思わず縮み上がる。何だかんだでやっぱりコイツ怖い。周囲に行く善良な市井の皆さんもストリートファイトでも始まるんじゃないかと沈黙し、駅前広場は突如として静寂に包まれた。

しかし……恐る恐る見守るそんな行人たちの中、自分より遥かに大きな息子と対峙したお母さんは、一旦口をつぐんだのち、月を背にした浪人のようにフツ、とクールな笑みを洩らした。

そして誰もが従う鋭いお声で、こう啖呵たんかを切った。

「アンタなんかにはまだまだ説教される覚えはないんだよ！ 凶体こんたいばっかりデカくなってホントにもう、百年早い！ 出直してきな！」

ほら、その荷物あの子らに返して、こっち持ちな、モタモタしない、お母さんがアンタの歳にはもうアンタ育ててたんだからね、とカッコイイお母さんは、間髪入れずにレイオウを追い立てた。

一方、さっきの一声で気力を使い果たしたららしいレイオウは諾々だくだくと指示

に従い、お母さんから紙袋を受け取ると、足元を飛び回る妹たちと共に、黙って改札の方角へのつそりと足を向ける。

そしてふいに、オレたちと来ていたことを思い出したのか、彼はやつれきったその顔を弱々しくこちらへ向けた。哀切極まる眼をしながら、最後の言葉を残す。

「……じゃな」

レイオウ一家は、人混みの中に消えた。

オレたち三人は、見えなくなった後も、いつまでも彼の後姿を見送っていた。

いつまでも。

8.

オレと双葉はバスに乗ろうとしたのだが、今日も大量の荷物を抱えた終夜が、タクシーを呼ぶ、方角は同じだ、と言うものだから、便乗させてもらうことにした。

車内で双葉と終夜に挟まれ揺られながら、オレは昼間のホラー映画の残像など軽く消し飛ばさっきの強烈なショックエンスを反芻していた。まだ全然呑み込めない。

子役のように可愛らしい妹二人は、揃って同じ歯の抜けたお口を大きく開いてそれぞれ茉莉花、妖精を名乗っていた。そうだ。あれはマイ・ネーム・イズという話だったはずだ。お母さんはそれを受けて、レイオウでやりすぎたからセーブしてこう名付けました、と確かに述べていた。

ということは。

レイオウの本名はあのグレートなお母さんが初子に喜びノーブレーキの本気出しちゃった名前、すなわち言語に絶し、理を超越し、人知の遠く及ばない孤高の煌めきを放つ画期的な痛名ということになるのである。涙が止まらない。

オレは、長年奔放な姉貴と脳天気な親を恨んできた自分を恥じた。愛ちゃんなんてどうってことない。あいつの本名は聞きそびれたけど、聞かずに済ませてあげたい。あの娘たちを上回るネーミングなんて、オレの全ボ

キャブラリーを縫ざらいしても出てきそうにない。カメとかインコではないのだ。友人の名前なのだから。どこまでがこの国の民の名として許されるものなのか。あんな当て字100%でOKなら可能性は無敵大じゃないか。

名前について演説をぶっていたレイオウの姿が、今になって胸を打つ。親は始めに、名前で子を縛るのだ。オレはそれをよく知っている。決して逃げられない鉄鎖だ。いや、オレやレイオウみたいな特異な例ばかりではない。どんな善い名前だって同じことだ。子どもに託す期待、夢、希望。悪意のない、一生懸命考え抜かれた、重い手錠。そしてそんなものが、時には人生を左右したりする。あんまりじゃないか。悲しい。けれど、どうしようもない。

さつき双葉にも何とか一通り伝えたのだが、そのせいで車内は沈黙で満たされていた。終夜も何も言えない。しかし、二人には分からないだろう。このやり場のないやるせなさ。

誰も何も言わないまま、タクシーは夜道を孤独に走り続けた。

前触れもなく、車は急に止まった。周囲の景色からして、終夜の言うとおりオレや双葉の家からそう遠くない場所に来ていた。終夜はさつと財布からカードを出すと、運転手に渡した。

辺りが薄暗くて近くの家並みもろくに見えない。荷物で両腕が剥落しそうになっているオレは、早く家に入れて、と終夜をせっついた。わざとじらすようにゆっくりと動く終夜は、すぐそばの壁に付いたインターフォンを押した。

「……衿原さん、開けて」

するとそのすぐ横、夜陰やいんの中で、視界に入りきらないほどの大きな門が自動でズリズリと開き、オレと双葉は眼を見張った。何事もないかのように、終夜はその中へと入っていく。躊躇ためらいながら、オレたちも後に続いた。

恐ろしく広い庭の中を物珍しそうに眺める双葉。オレは頑張って終夜に追いつくと、訊いた。

「衿原さんって誰？」

「……メイドさんだ」

あえてお手伝いさんと呼ばない終夜はやはりこちら側の人間だな、と思

った。

草木の生い茂る庭の奥にはコンクリ打ちっ放しのモダンな屋敷が建っていて、その玄関戸を開いて心配そうな面持ちで待っていてくれたのが、衿原さんだった。遺憾ながらエプロンを着けているだけの普段着だが、思いの外若くておっとりしたお姉さんだったのでまあよしとしよう。

「お嬢様、お帰りなさいませ」

喫茶店来店時とあまりに同じでデジャヴを感じたが、今日のお嬢様はオレではない。まあ実際、こう言うより他ないのだろう。当のお嬢様は小さく頷くと、荷物を広々とした檜造りの玄関先に乱雑に置いた。オレも続いて紙袋を全部壁にもたれ掛からせ、上がりかま框かまに座り込む。衿原さんは終夜に尋ねた。

「今日も、楽しかったですか」

「……うん。こっちがカミシナでこっちがフタバだ」

「いつも窺っております」

上品な微笑みを絶やさない衿原さんは、オレの顔を見て少しだけ首を傾げた。まあいつものことだ、と思っていたがそうではなかった。

「今度いらっしゃるときは、メイド服にいたしますね」

なんと行き届いた人だ。というか、終夜から何を窺っているのか。

終夜は小声で彼女に訊いた。

「……ママは今日は何時に帰ってくる？」

「十一時頃には。お夕食はいかがなさいますか」

「待つ」

はい、と包み込むような優しい声で応えた衿原さんは、オレが気の遠くなる思いで運んできた荷物を終夜の分も合わせて全部一人で手に持つと、失礼いたします、と笑顔のまま奥へ入って行ってしまった。素敵だ。

『……寄ってくるか』

後ろで手を組んだ終夜は、斜すに立って小さく前後に揺れている。彼女から手渡されたモバイルに書かれたそんな言葉を見て、オレと双葉は顔を見合わせた。オレは、双葉を促す。

かま框かまに腰掛けて、双葉は返事を書いた。

『今日はもう遅いから……また今度来てもいい？』

それを見て終夜は、うん、と頷いた。

+

街灯がひっきりなしに立っている明るい夜道を、双葉とオレは歩く。
『瑞歩みずほちゃんの家、すごかったね。庭にログハウスみたいのがあったよ』
マジでか。メイドさんで頭いっぱいじゃなかった。近場にとんでもない豪邸が割と最近建ったことは母親から聞いていたが、まさかそれが終夜の家とは。双葉は早くも、次はいつ遊びに行こうか、と嬉しそうに話している。

終夜の家も、まあいろいろあるんだろう。あれだけではまだ何とも言えない。ひよっとしたら速水さん辺りにかければ、「不幸な家庭」と呼ばれてしまうのかも知れない。遅く帰る母親、甘やかされた娘、家政婦任せの寂しい金持ちの家。つまらない脚本家が飛びつきそうな哀愁の定型モチーフが勢揃いだ。つついどこかで聞きかじった言葉で、語ってしまいうくなる。

けれど。

その人が幸福かどうかなんて、他人には永遠に分からない。

他人が誰かの不幸を語るとき、それは必ずウソなのだ。

だから、決めつけてはいけない。思い上がってはいけない。勘違いした哀れみや情け、そうした思いこみから生まれる「守らなければ、救わなければ」という一方的な情熱が、相手を一番傷つけ、苦しめるのだから。

そしてそんなことを考えてから、オレはちらりと双葉を見て、他人事ならこんなにつきり考えられるのになあ、とこっそり嘆息した。

10.

双葉の家に着いた。

寺嶋の言葉を思い出し、心配されているといけないと思ってオレも双葉の後から上がらせてもらう。ただいま、と声を掛けるだけではこの家では意味がない。帰ってきたら必ずリビングへ行き、バンバンと壁を叩いて

振動で注意を向け、お父さんお母さんに姿を見せる。お父さんもお母さんも聾者だから、これが普通だ。

『双葉お帰り。や、愛くん、元気？』

オレの性別を十数年目にして未だに疑っているというお父さんだ。ちょっと面長だが顔形は双葉とよく似ている。のんびりお気楽お気軽な性格も彼譲りだろう。

ただ、このお父さん割と素っ気なくて淡々と無表情なところがある。やっぱり双葉が表情豊かなのは、聾者だからというより単に双葉がそういう元気な娘だ、というだけなのかも知れない。彼はちよんソファに寝そべって、テレビドラマを見ていた。

『双葉……遅かったわねえ。どこ行ってたの』

夕飯の食器を運んできたお母さんが、目をわずかに細めて言う。責任問題↓お別れの危機にヒヤリとしたオレが必死で謝ると、お母さんも双葉も不思議そうにオレを見つめてきた。

柔和で少しイタズラっぽい眼や笑顔、綺麗な黒髪が、双葉とみんな同じだ。人懐こいところはこちらから来ているのだと思う。あともちろん、見事なスタイルも。

それから、いつものように双葉が今日あったことをお母さんに一から十まで報告したので、これは長くなるぞと思ったオレはこそそ退散しようとした。ところが、双葉はそんなオレに気づくと、すぐにオレの手を引いた。

『来て』

とだけ言うと、双葉はリビングを出て、オレと手を繋いだまま階段をとんとんと上った。

ついていくと、そのまま双葉は自分の部屋へと入っていった。思わずオレは、ドアの前で立ち止まる。FUTABAと書かれた木のプレートが掛かっていた。中学に入ってからは何となくオレの方が遠慮してしまい、双葉の部屋に入ったことはなかったのだ。

つい、躊躇する。

『どしたの？』

中から顔を出した双葉に促されて、照れるオレは床を見つめながら、部

屋へと入った。

もちろん一年やそこらでは変わりようもなく、室内は双葉の十二歳の誕生日、最後に入ったときのままだった。全体的にふわふわもこもこもふもふとしていいる。ウサギかヒツジのような部屋だ。白基調のパステルカラー、暖かくて、そしていい香りがする。

『座って』

と言う双葉と共に、オレはベッドに横並びで腰掛けた。枕周りのぬいぐるみコレクションも健在だった。いや増えている。オットセイとかカンガルーとかタヌキとか、微妙にズレたチョイスも以前と同じである。あの時オレが贈ったのは……ああ、あのコノハズクだ。去年のウリボウと一緒に枕のすぐ側にあった。よく見ると枕もアザラシの形をしていた。

双葉は黙っている。

ああ、何だか変に意識してしまう。双葉は別にオレを部屋に招いたところでどうという意味もないのだろうが、このところ醜態ばかりさらしているオレとしては、少しでも点数を稼がなければと必死になってしまう。こういうサムい間が空くのってティーンファッション誌辺りによく載ってるつまらない男のパターンだよなきつと……

『ええと……愛くんは、瑞歩ちゃんち、いつ行きたい？』

双葉がいきなり言ったので、オレは動じてしまう。

ええと、また来週辺りでいいんじゃない？

『そうだね……レイオウくんのお母さん、面白い人だったね』

ああ、想像以上だったな。妹も。

『うん……そうだ、あの映画さ』

それは、言わないで。

『うん……』

双葉は、窓の外や天井をぼんやり見ながら、何か考えている様子だった。一方オレは、話題が浮かばなくてひたすら気まずい。沈黙したまま時間が流れていく。双葉も、どうして突然オレを招き入れたりしたんだろう。

ふいに双葉はふう、と諦めたように息を吐くと、立ち上がった。

『……どうする？ ゴハン、食べてく？』

『え？ いやいいよ、そろそろ帰らないと親うるさいし』

オレが応えると、じゃ、行こうか、と双葉はドアを開け部屋から出て、
ばたばた階段を下りていった。オレはぼつんと座ったままだった。
……何だったんだろう。

+

帰り際、珍しく双葉は見送りに来てくれなかった。何か機嫌を損ねたる
うかとすぐダウナーな気分になるオレが玄関から出ようとしたとき、リヴ
イングからお父さんが顔を出した。オレは首を傾げた。

『どうかしました？』

するとお父さんは頬を掻いて、何か迷っている様子だった。けれど表情
が薄くて、何を考えているかはあまり伝わってこない。それから一言だけ、
こう尋ねた。

『双葉、楽しくやってるかな』

『ああ、はいとても。新しい友達とも』
楽しみすぎていて嫉妬を覚えるほどだ。さらにお父さんは、こうも言っ
た。

『愛くんとはこうして手話出来るからいいけども、双葉はほら、口話こうわも読話どくわ
も特に学んでいないから……いやもちろん、学ばせたいわけじゃ全然ない
けど。ただ、今どうしてるかと思って』

口話は文字通り口を使い声を出して話すこと、読話は相手の口の形から
話されている言葉を推測することである。聾者がこれをするのは、聴者に
は想像できないほど難しい、というより、ほぼ不可能だ。教師が喋ってい
るエチオピア語を防音ガラス張りの部屋の中で勉強するようなもので、ど
だい無理がある。

お父さんやお母さんの若い頃はそれでも無理をしてこれを学ばされたの
で、未だにある程度読話をするこゝなら出来るが、口話を使うことは決し
てない。いい思い出がないのだそうだ。

そして双葉の場合、初めから手話を使った教育を受けているのである。

『ま、それならいいんだ。ありがとう』

外暗いから気を付けて、と淡白なお父さんは言うと、猫背気味にのその

そと、リヴィングへ戻っていった。

11.

家に帰ったオレは、遅いだの心配しただの近々ある保護者会がどうのこのとうるさく言ってくる母親を適当にいなしつつ夕食を摂り、風呂に入ってから早々に自分の部屋へ戻った。

今日は疲れた。あっちこっち廻ったのも大変だったが、それよりも頭に入ってくる情報量が多すぎて、何だか気疲れする。

テレビをつけてベッドに寝っ転がると、すぐにニュースが聞こえてきた。「……これらのPTA推薦図書は、全国各地の書店で定価より安く購入することが出来るようになります……次のニュースです。今日から施行された改正児童福祉保護管理法、通称PC法によって定められた、児童の交友関係に対する干渉の権利が、早くも本日全国四ヶ所で行使された、と教育省からの発表がありました。

これは、児童が親しく付き合う人物に親権者が何らかの危険や問題を感じた場合、希望に応じてPCシステムを利用した制限を加えることが出来る、というものです。具体的な都市名や児童の個人情報には明かされてはいませんが、これに対し勅使河原教育大臣は次のように述べています。

『まあ早速利用していただけたということだね、私はとても嬉しい。朱に交わればと言いますが、児童の非行の原因としてはまず第一に、周囲の人間からの影響がある。それを未然に防ぐことが出来るという意味で、この方法は大変有効です。子どもたちは不満に感じていても、やがて長じてからは親御さんの優しさ、正しさに気づくはずですから。間違いない感謝する』

大臣はこのように述べ、今後ともこうした権利の拡張を進めていくと共に、PCシステムの強化に向けて全力を尽くしていく姿勢を示しました：明日は教育省が定める全国一斉保護者会が、全国各地の学校で実施されるテレビを消してオレは布団を被った。へドが出る。

12.

そうして目を覚ますと深夜二十六時十四分だった。

すっかり寝入ってしまった。時計を見て瞬間的に覚醒したオレは体内時計の無駄な精確さに感謝すると同時に布団を跳ね飛ばし、大慌てでテレビの電源を入れた。チャンネルを合わせ、深夜特有の胡散臭いCMを見てホッと胸を撫で下ろす。まだ始まってなかった。

もちろん、ゼロミコの時間だ。

どうのこうの言っても、やっぱり続きは気になる。恐らく制作側もPTAからの抗議くらい覚悟の上であんな展開にしているのだろう。そろそろストーリーも後半戦に突入、あれだけやらかしておいてどうやってラストまとめ上げるのが気になる。まとめ上がらないとしてもそれはそれで見ておきたい。そのことに、理由なんかはない。

どんな鬱展開であろうと、残酷悲惨な物語であろうと、そして誰がそのことを非難しようと、今オレが見たいと思うもの、今面白いと思うものは、この作品なのだ。ただ、それだけだ。

それに今日は、流れからいってヒロインに確実に長ゼリフがあるだろうし。ウン。

さあ、時間だ。何がどうなるろうと、このアニメは最後まで見通そう。オレは身構える。画面隅の時計が十四分から十五分に今、変わった。

そして、テレビ画面いっぱいに映し出されたのは、

美しい夕暮れ時の湖面に浮かぶ、一艘そうのボートだった。

……なんていいボートだ。

いやいやそうじゃなくて、え？ なにこれ？

一瞬パニックで、頭が真っ白になった。それからオレは、チャンネルを何度も確かめる。合っている。時間。日曜深夜二十六時十五分。間違っていない。それなのに、なんだこの癒し系ヨーロッパアンカントリー映像は。残雪ざんせつを戴いたいた山脈を背景に、そのボートは人を小馬鹿にするような速度でのんびりのんびりと画面を横切っていく。

厭な予感が背中を駆け抜ける。

茫然として瞬きもせず画面を凝視していると、たった一行、白文字のテロップが上辺に現れた。

「テレビアニメ『零の巫女』は、諸般の事情により、先週分をもちまして放送を休止させていただきます」

……は？

意味が分からなかった。見間違いかと思い、何度もその簡潔な文章を読み返す。

意味が、分からなかった。

結局三十分間、ボートがただただらとやる気なく映り続けただけだった。

オレは次第に落ちてきた頭を整理しながら、パソコンを起動した。ネットアニメの公式サイトを調べてみる。何か事情が分かるかも知れない。ブラウザのお気に入りフォルダの中のアイコンをクリックする。

しかし……サイトはなくなっていた。

そんなバカな。ついこの間までは確かにあったのだ。それほど見る情報もなかったからこのところチェックしていなかったが、それでも在^あった。

不安に駆られ、検索をかけてみる。ひよっとしたらURLが変わっただけかも知れない。

検索にも、全く引つかからなかった。

他のサイトに埋もれているわけでもない。第一、公式サイトがファンサイトに埋没するなんてこと有り得ない。それなのに、検索結果を十ページ目まで開いてみても、ゼロミコの公式サイトはその跡すら見いだせなかった。検索エンジンを替えても同じだ。

オレは、何かいかなともしがたい、不愉快で傲慢で強大な力がゆっくりと覆い被さってくるのを感じた。

思いつく限りすべてのワードを検索してみる。

アニメ製作会社のサイトの作品リストからも、ゼロミコの名前はなくなっている。

DVDの予約ページはどこも「発売が延期になりました」と表示する。フィギュアの製造元サイトからも、ゼロミコ関係のフィギュアは抹消されている。

出演声優のサイトの出演作品一覧からも、露骨に一行消去されている。原作ゲームの公式サイトすらも、跡形もなく消滅していた。

ゼロミコは、なかったことになっていた。

そして。

オレは、何をやる気力も失せた。

いろんなことがバカらしくなった。熱中していた自分自身も、バカみたいに思えてきた。

毎週毎週夜中まで起きて楽しみに待っていたのもバカみただし、レイオウと嬉しそうに意見を交わしていたのもバカみただし、PTAの抗議に負けず続けて欲しいと真剣に思っていた自分も、もうどうしようもなく、バカみただった。

オレはベッドに飛び込んだ。今頃ネット上のあちこちの掲示板で熱心に戦わされているであろう議論や理由の推測など、どうでもよかった。それに理由はもう、見当が付いていた。

本日付で施行の改正PC法。ハゲの演説が頭に甦る。

「お子様方の眼の触れる範囲に性的な描写を含む物品を発見した場合」

「一般の国民の皆様方であっても」

「皆様方の良識に従い自由に」

「見つけ次第処分させることが出来るのです」

「またこれは性的なものに限らず、保護者の方から見て子どもに見せるに相応しくないと考えられるものすべてに関して適用することが可能です」
抗議もクソもあるものか。

誰かが気に入らないと言ったらデリートされるのだ。

バカみただ。

本当に、バカみただ。

吐き捨てるような気持ちで眠りに落ち込みながら、それでもオレは、一

抹の不安を覚えた。

前回規制の対象になったエロ関係は、性犯罪の発生をきっかけに始まった運動だった。どう考えてもその手のエロ作品と犯罪との間に証明可能な科学的客観的な因果関係は存在しなかったが、規制する側にはそんなもん関係ない。彼らには素晴らしき「正義」と「道徳」がある。まあ何にせよ、せめて彼らなりの筋道があった。

けれど、今回のこれはまだ、何の事件も起きていなかった。別に起きればいいというわけではないけれど、でもそういう意味で、前回とは質が違

う。これから何が始まるのか、厭な胸騒ぎを感じながら、オレはどんよりとした眠りについた。

13.

「定時となりましたので、本年度の全国一斉保護者会を開会させていただきます
きます」

神志那幸枝が体育館にぎっしりと並ぶ保護者たちの隅の席に着くと、美園学園中学のPTA会長が厳かにそう宣言するところだった。今は午前十時、いつまで経っても起きてこない息子の昼食を用意して、幸枝は慌てて駆けつけたところである。

年に一度全国で同時に行われるこの保護者会は、全校休学にしてすべての保護者が出席する学校最大の催しであり、P.C.の理念に照らし合わせれば何をおいても参加せねばならない最重要の行事でもあった。平日だろうが関係はない。遅刻などしたら、他人から何と言われるか分かったものはなかった。

入口で渡された電話帳のように厚い資料の最初のページをめくる。午前中いっぱい、全校集まっつの講演、午後からは、各クラスごとに別れての懇談会。幸枝はため息をついた。

今年も五時六時までかかるのだろうか。口に出しては言えないが、うんざりする。しかし、幸枝にとっては不可解なことに、この懇談会が年に一度の晴れ舞台とも心得ているような保護者がどのクラスにも必ずいて、

毎年やたらと議論が紛糾ふんきゆうするのである。皆、「我こそはクラス一子どものことを考えている模範的な保護者である」とでも言いたいようだった。

誰も聞いていない校長挨拶教頭挨拶の間、幸枝は資料をパラパラと斜め読んだ。例年以上に密度が濃いなあなどと思っていたが、それはどうやら、昨日から施行された改正P.C法が原因のようだった。ニュースなどでざっとしたところは聞き知っていたが、ほとんど把握していない。正直言って幸枝も夫も、息子をそこまで積極的に保護・管理しようという気はなかったのである。

あの子だって馬鹿ではないのだからそれくらいは自分で考えるべきだろうと常々思っていたし、また実際にそうしてきていた。P.Cシステムどうこうにも、大して関心はない。したがって、具体的にどのように法が変わり何が出来るようになったか、この時点で幸枝はまだ知らなかった。

まばらな拍手の次に登壇したのは、午前中のメイン講演者だった。

「本日のためにわざわざ教育省キョウイクシヨウよりお越しいただきました、管理システム課課長代理、山村啓吾様やまむらけいごです」

目付きの鋭い、尖った顔立ちの男だった。話し出すと、声にまで棘があった。

「今日は皆さんに、P.Cシステムをいかにして活用するか、についてお話ししたいと思います。私も教育省キョウイクシヨウでは、長きに渡りお子様方を危険から守る方法について開発・研究を重ね、啓蒙を続けて参りました。しかしながら現在におきましても、十分にP.Cシステムをお使いくださっている保護者の方は圧倒的に少ない。これはゆゆしき事態です。システムの利用は、国民の皆様の重要な権利であるわけでして」

山村は資料に載せた詳細な数値データを示し、いかに普及が遅れているか、それがいかに子どもたちに危険をもたらすかについて、統計学的見地から力説した。幸枝はははあ、と思う。

——へえ、そうなのか。

「続きまして、現状のシステムがどこまで進歩しているかについて、簡単にご説明したいと思います」

山村は実物のP.Cチップや監視用センサー、ゲート、カメラなどを実際に持ち出して、どういう風に機能するか、どれほど確実か、それが子ども

たちをどのようにして危険から守るかについて、科学的な見地から事細かに語った。幸枝はそれを聞いて頷く。

——私の頃とはだいぶ違っているのねえ、すごい。

「最後に、改正P.C法がどのようにお子様方を守るか」

山村は資料の中の最新条文をかみ砕いて説明しながら、これによって何が可能となるのか、そのことが子どもをどうやって危機から救うのか、そうしたことに対する親としての道徳的義務、重要性、良識などについて、法学的見地から広範に巧みに論じた。幸枝はこの話を聞いているうち、今の自分の脳天気ぶりがいささか恥ずかしく思えてきた。

さらに山村は、昨今子どもを狙ったどのような犯罪が発生しているのか、スライドも用いて具体例を示しつつ分かりやすく説明する。そのあまりの残忍非道ぶりに、幸枝は眉を蹙めた。

「何かが起きてからでは遅いのです」

そして山村は付け加えるように、近頃では教育省キョウイクケンの相談窓口にも、「子どもの行状ぎやうじやうに困り果てている」「法律的にはどうすることが出来るか」などといった真摯な保護者からの質問も多く寄せられている、と述べた。

体育館内は静まりかえった。

「山村様、ありがとうございます。続きまして、本日は何と、本校OBでもあります県教育委員長、速水恭一郎すみづいさむらう様に、大変お忙しい中お越しいただきました」

登壇したのは温厚な顔をした、白髪交じりの紳士だった。

「まあそう固くならず、気を楽にしてお聞きください。実は今、私にも中学二年の娘が一人おります。中学生高校生といえますと何かと誘惑も多い時期で、親としては毎日心配で仕方がない。無論子どもを信じてはいるわけですが、しかしなかなか完全に安心することが出来ない。どこへ行ったか分からない、何時になっても帰ってこない、誰と付き合っているか分からない、何をしているか知れない。親になったが最後、こうした悩みが尽きません。そうしたときにP.Cシステムを利用していますと、これがずいぶん気を休めることが出来ます。私の経験上そうです。先に挙げましたどの悩みも、P.Cシステムを使って解決することが出来るのです。我々教育委員会、教育省、PTAは、皆様方親御さんの味方です。思う存分頼って

いただいて結構です。もし方が一、システムをご利用いただいていないようでしたら、是非ご一考ください」

速水教育委員長は、こんな具合に優しく話した。

幸枝は考える。彼らの言っていることは実に正しいことだ。これまでの考え方は、さすがにちよつと甘すぎたかも知れない。最近では息子も帰りが遅くなるのが少なくなない。ウェブを使えばどこにいるかどうせ簡単に突き止められると思つて、さして気にしてはいなかったが、考え直した方がよいのかもしれない。息子のためだ。

とはいえ、急進的な人々のように規制で縛り上げるのは性に合わない。息子にはあくまで自由でいて欲しいし、中学校生活を楽しく過ごしてもらいたい。そういう意味では、教育委員長の言う「緩やかな、漸次的な利用」ぐらいで充分だろう。うちの子にはそれぐらいの分別はある。厳格なばかりの理解力のない親などなりたくない。柔軟な、優しい親でいたい。

——さて、それではとりあえず、どうしようか。

教育委員長の話を聞きながら、幸枝は考え始めた。